
美里優がなぜ、中林義貴へと名前を変えたのか

窪まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美里優がなぜ、中林義貴へと名前を変えたのか

【Nコード】

N5861Y

【作者名】

窪まり

【あらすじ】

安藤まほろと美里優との戦い(?)によって鍛えられた美里優という少年は、株で大もうけして、オタクの御殿を作り、名前を中林義貴と変えた経緯を小説にしました。

原作「まほろまっぺいっく」は「これが私の御主人様」とは設定が大きく異なりますので、その辺はご勘弁を。要するに謎のペットロボットをつれてくる姉妹が後ほど登場します。

ド
ミ
マ
C
C
D
D
の
よ
う
な
感
覚
で
読
ん
で
く
だ
さ
っ
た
ら
あ
り
が
た
い
で
す
。

繰り返される平和な日常（前書き）

安藤まほろと美里優との戦い（？）によって鍛えられた美里優という少年は、株で大もうけして、オタクの御殿を作り、名前を中林義貴と変えた経緯を小説にしました。

原作「まほろまっぺいっく」の「これが私の御主人様」とは設定が大きく異なりますので、その辺はご勘弁を。要するに謎のペットロボットをつれてくる姉妹が後ほど登場します。

繰り返される平和な日常

美里優の家では、ごく日常的な生活を送っていたが、とつぜん、美里優という少年が、安藤みなわを押し倒そうとしたとき、まほろは美里優を取り押さえた。

『ガチャーン!!』

「キヤー!!」

「もう、我慢できないだよ!!!」
理性を失った美里優は、安藤みなわを襲うとしたとき。

まほろは美里優のほほを思い切り叩いた。

『パッシン!!』

そして、美里優を押さえつけ身体が動かないようにした。

まほろ「なに考えているのですか!優さん。突然、みなわちゃんを押し倒すなんて!!」

美里優「もう我慢できないから・・・。」

まほろ「なにが我慢できないのですか?言っでご覧なさい!」と叫んだ。

美里優「だって、まほろさんにエッチな本を取り上げられるから・・・」

まほろ「エッチな本がなくても死にはしないでしょ。」

その時、式場沙織先生が突然、美里優の家に忍び込んだ。

式場「いいじゃない。エッチな本の一冊や二冊くらい。たまには息抜きをさせなければ。」

まほろ「エッチなのはいけないと思います!」

美里優「それに、お風呂も一緒だし。どこで発散すれば良いの?」

式場「で、美里くん。最近、株での儲けはどうなの?」

美里優「それが順調で。本当ならエッチな本の百冊でも千冊でも買えるのですが。」

「それに、最近、アニメにはまって、フィギアを買おうと思つのです。」

まほろ「だから、エッチなのはいけないと思います。いいですか優さん・・・」

式場「フィギアの二つや二つくらいどうと言つことないでしょう。」

美里優「それが最近、まほろさんの料理を食べると、なぜかムラムラしてくるのです。」

で、式場沙織先生は台所に行き、まほろさんが作った料理を食べてみた。

まほろさんが作った料理には謎の隠し味があり、それをダイレクトに飲むと、完璧に理性を失う。

式場「わたしも何だかムラムラしてきたわ。ねえ優くん。一緒に……。」

まほろ「何度言ったら解るですか！エッチなのはいけないと思います！」

まほろは、式場先生の首筋を思い切り叩いた。式場先生は気絶した。

まほろ「最近の優さんたら、株やらフィギアとかアニメなど、オタク道突っ走っているから将来が心配で……。」

美里優「僕の母親でもなくせに勝手に、人の本を盗むな。まるで泥棒じゃないか。」

まほろ「なんで、そんなに酷いこというの優さん。」まほろは怒りを通り越して悲しんだ。「だって私のプログラムでは、エッチな本は始末するようにプログラムされているのですから。」と流して涙を流して泣いた。

美里優「ごめん。言い過ぎたよ。」「でも、エッチな本くらい読ま

せてくれないかな!」「最近、株で儲けたから、まほろさんにも何か欲しいものを買っても良いけど。」

まほろ「なんで、みなわちゃんをいつも押し倒すの?!」

美里優「だから、発散する場所がないから・・・。」

気がついた式場先生は「良いじゃないの年頃の男の子だからさ。」

- - - - -
- - - - -

と言う風に、毎日、美里優の家では、同じような日常を繰り返しているのである。

投資した株がおもしろいように上がる（前書き）

中学生で株の長者になった美里優。

学校でも株のことで頭がいつぱい。

将来の夢は経済ジャーナリスト。

投資した株がおもしろいように上がる

美里優は授業中でも耳にイヤホンをつけて短波ラジオの株式情報を聴き続けた。

授業どころではない。

で、式場先生以外の教師から、授業中はラジオを聴かないように指導された。

中学生で株に手を出すとは、また世界的に景気が悪いのに、まるでバブル景気のように株で儲けられるとは、経済の動向に対して天才的なセンスがある中学生なのである。

国語の作文でも、将来の夢は経済ジャーナリストになることだと言うくらい株とオタク趣味だけの才能がある。

式場先生以外の授業では。

「美里くん。きみ何のために学校に来ているのだね。」

「勉強しに。」

「勉強しに来るなら何故、ラジオを授業中に聴いているのか。」

「それは、将来経済ジャーナリストになるためなんです。」

「じゃあ、ちゃんと授業を聴かなければいけないじゃないか。君の

成績は徐々に下がってきている。経済ジャーナリストになるなら、ちゃんとした大学に入らないと行けないじゃないのかね。」

「先生の話は、ボイスレコーダーで毎日録音していますし、ちゃんとノートもとっています。」

「でも、リアルタイムでちゃんと授業を聴かなければ、復習などできないじゃないか。それに君は、いったい何時間寝ているのか。」

と、頻繁に学校の先生に叱られることが良くある。

式場先生は美里優の株への天才的な才能を見通し理解をしめし「中学生が株で儲けるとは、ある意味では天才ではないの。それを摘み取るのではなく、育てるのが教育ではないの。」

他の女教師たちは「まあ、中学校までが義務教育だから、全然勉強しなくても問題ないけど、やはりある程度の基礎学力がないと将来大学に行けないわね。」と言った。

投資した株がおもしろいように上がる（後書き）

株の天才少年である美里優に理解がある式場沙織先生の説得により、授業中にラジオを聴くことを許された。

いろいろと思いついたことがあるので、スペースがゆっくり進むと思います。

読んでくださり感謝します。なるべくスラスラ読める読みやすい文章にいたします。

景気が悪いのに株で儲けられる天才少年（前書き）

ほとんどアクセスないので、もう勢いで書き込みます。（今回は途中でやめてしまったので、その影響もあると思います。）奇跡的にこの小説を読んでくれたかたには、感謝いたします。

なお「パラレル少女・ほむらちゃん」の方は、丁寧に書きますので、そちらの作品を、よろしく願います。

なお、誤字脱字がある場合がありますが、後ほど修正いたします。

景気が悪いのに株で儲けられる天才少年

美里優の家は徐々にオタクの御殿になりつつある。

親が残した財産があり、その財産の一部を株に投資することによって、徐々に財産を増やすというやり方をしているので、ある意味では経済の天才少年である。

学校の勉強なんて、もうどうでも良い。

徹夜で経済関係の本を読みあさり、伸びそうな企業に投資することで、徐々に財産を増やし続け、気がついたら資産が一億円に達した。

「大学いかないで、中卒からスロ―ライフも良いのではないかな。」と美里優は考えていた。

「そろそろこの家も手狭になったな。」

「まほろさんに束縛されないために、自分のためのマンションを購入しようかな。」とニタニタとした顔をしながら考えこととして、まほろさんが

「なにニタニタした顔をしているのですか！？またエッチなことを考えているでしょう！」と言い、美里優の下半身を見た。

「おかしいですね？たいてい変な妄想を考えている男性の場合、あのへんが・・・。」

「資産の使い方のことだけを考えているのだよ。まほろさん！」

まほろ「で、私に隠れてエッチな本を買う予定でしょう。ちょっと話が違うけど、最近、みなわちゃんが優さんのことを怖がるようになったの。突然、襲ったり、寝ている間に変なことをしようとするば、私、この家を出ますからね。許しませんからね。覚えていなさい。」

「なんだよ、いちいち文句言いに来て。」「で、そんなに文句を言うなら、給料を上げないぞ。」と美里優が言った。

まほろさんは勤勉な性格だから、やはり美里優の将来を心配した。

『いまは良いけど、株ってギャンブルみたいなものだから、もし株が大暴落したらどうなるでしょう。この家もなくなつて路頭に迷うようになるわ。ちゃんと私がついて優さんを見守らなければならぬいわ。』

で、夕食がきた。

妹の安藤みなわちゃんは、おびえながら食事をした。

「何も、おびえることないわ。今度、優さんが、みなわちゃんのことを襲ったら、半殺ししますからね。」

美里優「だって最近の、まほろさんの料理が美味しくなったと思ったら、なんだかムラムラしてきて自分を押さえようとしても、どうにもならなくなるのだよ。なにか変なものを入れていないのではな
いか。」

確かに、料理の腕前は、この辺にいる調理人よりも素早いし、動きもきれい。出された食品も見た目は美味しそうに見えるが、味の方がいまいち。

みなわちゃんは、優をみるといつ襲ってくるか解らないから、怖く
なって、食事も喉を通らなくなった。

「あら、みなわちゃん。ちゃんと食べないと育たないわよ。」

みなわ「だって、お姉ちゃん。優さんがいつ襲ってくるか解らない
から。こわくって食事どころではないわ。」

美里優「確かに以前よりは、まほろさんの料理の味が美味しくなっ
たけど、なにか変なものを入れているのは確かだ。たべると興奮す
るのだよ。」

「あら、私の実家（セントゥヴェスパ）直伝の調味料を使うよ
うになってから、優さんの様子が変になったわね。エッチな本を取
り上げただけではないかも。」

「それだよ。エッチな本を取り上げただけではなく、最近の、まほろさんの料理がおかしいよ。」

「申し訳ないが、今日は外で食べようよう。まほろさん。みなわちやん。」

「優さんの言うとおり、お金がたくさんあるし、今日はみんなでレストランへ行きましょう。」

「さあ、今日は優さんが襲わないから、みなわちゃんも安心して料理食べられるからね。」と安藤まほろがいった。

で、食事の準備の手間が省けたのは良いけど、株はやはりギャンブルみたいなもの。

どうせ経済ジャーナリストになるなら、将来、オタク趣味をやませせて大学に行ける学力をつけさせなければ行けないわ。

で、あるナノマシンを頭に刷り込む方法を思いついた。

それは……。

景気が悪いのに株で儲けられる天才少年（後書き）

奇跡的にアクセスして下さい下さった方には感謝いたします。
まだ続きがありますのでよろしくお願ひします。

さて、どうしたら勉強のおもしろさを感じさせられるのか（前書き）

アクセスして下さったかたには感謝いたします。

で、次はどうしたら勉強のおもしろさを感じられるのかということ
です。

この回も勢いで書き込みますのでよろしく願います。

さて、どうしたら勉強のおもしろさを感じさせられるのか

まほろさんは、優くんの将来を気にして、いかにして勉強のおもしろさを感じさせるか考えてみた。

なかなか、暗記するのが得意ではない優くんの場合、勉強は苦痛である。

で、次第に学校の成績が下がる一方であり、暇があれば経済関係の書物をよみあさり、株の投資をする。

中卒スローライフで一生を送るなんて、世の中、そんなに甘くない。いつかは、大きなしっぺ返しがかかるはず。立派な経済ジャーナリストになるために、まほろさんの闘いがいま始まるうとしている。

まほろさんも、美里優の家を出ても行く先がないし、美里優もまほろさんなしでは、部屋が散らかるだけである。また料理もできないから、二人ともお互いに依存し合う関係になってしまった。

まほろさんは、優の部屋に忍び込んで、（部屋の鍵をかけても、まほろさんは鍵を開ける得意な才能があるから）美里優の頭皮にナノマシンを塗り込んだ。

それを塗り込むと、まほろさんの生きたロボットになるのである。

アンドロイドである安藤まほろは、人間とロボットの関係を逆転しようとしていた。

まほろさんが考えているのは、学校の勉強をすれば、躁状態になり、勉強をサボれば、鬱状態にさせることで優をコントロールすることである。

万能メイド・アンドロイドである安藤まほろは、ついに美里優の頭にナノマシンを塗りつけて脳にナノマシンを埋め込んだ。

ナノマシンは頭皮の隙間から、入り込み脳の幸福感を司る部分を刺激するナノマシンを大量に埋め込んだ。

.....

翌朝

「まほろさん。おはよう」

「おはようございます。優さん。」

で、こっそりと幸福感を司る部分を刺激したら、「今日は、何だかとても幸せな気分だ。今日も元気で学校に行こう。」と喜々揚揚と叫びながら、鼻歌を歌いながら朝食を食べた。

「あれ、今日のまほろさんの料理をたべてもムラムラしない。味も美味しい。なんだか幸せ」

ボイスレコーダーの電池を新しいものに取り替え、

「はいボイスレコーダーの電池確認OK！ノート・教科書・確認OK」

で、まほろさんは言った。「株はギャンブルだし、数年前にも100年に一度の株の大暴落があったから、また暴落が起きる可能性があるかもしれない。だから、ちゃんと経済ジャーナリストになるためには大学にきちんと行きましょうね。」と、ほほえみを浮かべながら、まほろが語った。

まほろなりに、中学生の勉強方法を教えてあげた。「まず予習・復習することを確実にやるべきって来てね。将来大人になっても後悔しないために、今のうちにちゃんと勉強をするのだよ。」と言うと、優は機嫌が良いので、そのようなことを言われてもカチンとこなかった。

「了解しました。まほろさん！勉強をするきになったぞ。遅れを取り戻そう！」と言って、学校に向かった。

優のケータイに、まほろからの電話があった。

「あ、それから授業は真剣に聴きなさいね。聴いたことは必ずノートにメモするように。」

「わかった わかった まほろさんって、可愛い声しているね。じ

「やあね。」とケータイを切った。

授業中の話を真剣に聴くようになった優は、家に帰った時に、勉強しようとしたが、機嫌が良い状態がいつまでも続かなかった。

「なんだか疲れた。昼寝をしたい気分だ。」

「そんなこと言わないで、これから勉強をしなさい。授業の内容を忘れないうちに。」

まるで、まほろさんは優の母親みたいだった。

だが、学生服から部屋着に着替える時に必ず身体検査をするのが、まほろの癖である。

「あれ、今日はパンツが汚れている。まさか、学校のトイレで発散したのでは!」

「だって、男の子だからしかたないでしょう。そうしないと、いつ、みなわちゃんを襲うか解らないし、それにまほろさんも時々みるとムラムラしてくるのだよ。」と言ったら、まほろは怒りだし、説教をくどくどと夜の12時まで続けてしまった。

「あれ、時間の無駄をしてしまったわ。」

「今日はこの辺でおしまいにして明日の為に、ゆっくり寝ましょう。」

まほろさんが来てから、優くんは性的発散行為が許されていないのである。

- - - - -

美里優「このままだと某・秋 原事件の容疑者二みたいになるかも・
・。」「と思った。

確かに、まほろは母親役としては、異常教育ではないかと思う。

さて、どうしたら勉強のおもしろさを感じさせられるのか（後書き）

どうしたら、勉強をするのがたのしくなるかということは次の回にも書き込みます。読んでくださった方に感謝します。 m | | m

再び みなわちゃんが優に襲われる（前書き）

まほろさんが優の家に住み着いてから、性欲が異常なくらい強くなった。

管理者から逃げ出したサイボーグ少女・安藤みなわが常に優に襲われる毎日である。

再び みなわちゃんが優に襲われる

日曜日の朝、美里家では少女の大きな悲鳴がした。

「キヤーーーーーアア！やめて！お姉ちゃん助けて！」

異常に強い性欲に負け、理性を失った少年、美里優に襲われた少女・安藤みなわが、また押し倒された。

みなわは激しく抵抗したが、理性を失った美里優は、まるで獲物を襲う獣のようだった。

みなわの服を破こうとしたとき、まほろさんが優の背後にいて、優の首筋を思い切り叩いた。

気がついた時、なんだか訳が解らない状態になった美里優がいた。

「あれ、今朝、朝起きた時に、朝食を食べ、勉強をしようとして教科書を読んで、それから……。」

「気がついたら、なぜこんなところで寝ているの。」

優が気絶してから1時間くらいたった。

優のとなりに、まほろさんが立っていた。

「まほろさん……。いててて。」首筋に強烈な痛みが走った。

まほろさんは優をにらみつけていた。

「どうしたの、まほろさん。」

まほろさんはキツイ口調で美里優に話しかけた。

「どうして、いつも、みなわちゃんを襲うの！」と冷たい口調は、いつもの、まほろさんらしくなかった。

「そういえば、玄関先で、みなわちゃんの後ろ姿を見たら、背中と腰のくびれを見たときに、ムラムラしてきて。気がついたら……。」

優は思い返した。そして自分がやったことに罪悪感を強く感じて気が落ち込んだ。

「また、やってしまった。どうして、いつも、みなわちゃんを襲うのか。まるで犯罪者じゃないか。」

まほろさんは優の心の中の言葉を読み取るような感じで、優に冷たい口調で言った。

「そう、本来なら強姦未遂者として警察に訴えるけど。」

「だって、まほろさんがエッチな本を取り上げるし、それに性的発散行為をさせないように、いつも添い寝をするし、お風呂も一緒に、トイレの近くで時間を計っている。それに、まほろさんの料理を食べると、なんだかムラムラしてきて、何でも良いから、発散したくなる。」と言ったら

まほろさんのとても長い説教が始まった。

まほろさんの説教が終わったのが、夕方の6時である。

優は、今日一日の休日が無駄に過ごしてしまった。

再び みなわちゃんが優に襲われる（後書き）

メイド・アンドロイドに支配される美里優の青春とは。
後ほど、つづく。

まほろさんのナノマシン・ジェルに支配される美里優（前書き）

いかにして美里優が、中林義貴へとオタクで性格が悪い少年になった過程を書き込みます。

まほろさんのナノマシン・ジェルに支配される美里優

まほろさんが産まれたのは、いまから9年前、セイントからヴェスパへアンドロイドが移管されたとき、セイントのオーバーテクノロジーを受け継いだのが、管理者とヴェスパである。

秘密裏にセイントによる文化的支配の実験施設として機能しているのが、まほろがメイドとして働いている美里優の家である。

セイントとは、はるか彼方にある惑星、もう一つ地球があり、そこに極限的な禁欲主義に徹底したカルト宗教団体であるセイントが、地球に向かう時に、脳内を操る苦行を行っていたのである。

初期のセイントの場合、信者に頻繁に脳外科手術や薬物投与、それに催眠術で、性欲を増強させて苦行を行ったが、さまざまな危険があるため、セイントがいた世界では、ナノマシン・ジェルが開発され、頭皮や首筋に刷り込むだけですむ、最も安全な脳を操る技術を習得した。

だから、セイントが地球に向かう時、かなりの長寿であり、平均寿命は約400歳くらいである。

それで結婚する年齢は平均200歳だから約200年近く性的禁欲主義を強要させられるのである。

まほろさんの調味料にもナノマシンが入っており、それを身体の中に入ると脳にナノマシンが自動的に移動して性欲を司る部分を強く刺激するから、美里優は、極限的な強い性欲を常に感じるから、安藤みなわを襲ってしまうのである。

美里優が住む街にも初夏が訪れた。

まほろさんと美里優の、より激しい戦い（？）が今、始まるうとしている。

まほろの要請でハイテク・メイド服がヴェスパーから支給された。

それはスケスケメイド服であり、外出すると自動的に、スケスケが消えて普通のメイド服になるというハイテクメイド服である。

また、スカートの長さが短くなったり長くなったりするので、優の目の前に半裸に近い、かなり露出度が高い少女が二人いると、ふつうの少年でも情欲を抱くようになるのである。

だから、文化的にも、精神的にも征服された美里優は、徐々に性格が悪くなった中学3年生の夏のある日のこと、優がお風呂にはいると、必ずまほろさんも一緒に入るのである。だが、裸ではなく、膝まである、太ももを完全に隠したハーフパンツにTシャツ姿だから、見ている情欲がおきないのであるが、お風呂場で性的発散行為をしないか監視しているのである。

「優さん。お背中流しましょう。」

『ザバーツ……。』

ついでに、まほろさんの姿が見えないように目隠しされる美里優。お風呂場では、まほろさんの姿は見えず、声だけしか聞こえないから、会話するしかできないのである。

「では、男性の象徴である部分も洗いましょうね。」

「そこは自分でやるから、いいから。いいから。やめてよ、まほろさん。」

「そんな遠慮しないで、じっくり洗ってあげますから。」

と優の男性の象徴である部分に、なにかヌルヌルしたものを塗り込まされた。

まるで、性風俗店のサービスみたいである。

男性の象徴が勃起しないか、どうか調べる為のナノマシンがあり、また性的発散行為をしたら、自動的に、まほろさんに知らせる仕組みになっている。

「はい、ナノマシン注入終了。」

「何をしたの？」

「優さんが性的発散で時間の無駄使いをしないために、ナノマシン・ジェルを塗り込んだのよ。」

「これから、もしちょっとでも勃起したら、ただでは済まされませんからね。」

「まほろさん。僕くらいの年齢の健康な男子は、勃起くらいしてもおかしくないよ。それに、『食べるとムラムラする調味料』を入れられるし、なぜ僕のことを、支配して、どこがおもしろいのだよ。」

「私の実家では、みんな優さんの年齢なら、それくらいの禁欲主義を強いられて当然です。」

「ここは、まほろさんが産まれた世界ではなく、この惑星は地球で、ここは日本という国なんだ。勃起したりエッチな本を読む権利があるのだよ。まほろさんがやっていることは、越権行為！治外法権だよー！」

お風呂場から出た、まほろさんと優は、優の身体をバスタオルで拭き、パジャマに着替えさせて、脱衣所から出た時、スケスケのスカートが短いメイド服の姿になっていた、安藤みなわの姿をみて、勃起してしまった。

その時、まほろは怒鳴った。「優さん！何、エッチな目でみている

の！」

まほろは、もう一言いった。「本当の男なら、スケスケ、ミニメイド服を見ても勃起しない。」

まほろは、さらにもう一言。「優さんたら、とても意志が弱すぎて、将来が不安だわ。情けない。」と、半分軽蔑したかのような言い方をした。

優は反論し、「こんなスケスケの短いメイド服を見たら、誰だってエッチな気持ちになるよ。」

みなわ「お姉ちゃん。優が、また襲うとしてる。獣みたいな目で私を凝視（視姦）しているわ。怖い。」

優は、みなわを見ないように視線を別の方に向けた。だが、みなわの姿が脳裏に焼き付き、ムラムラしてどうしようもなかった。

まほろ「ねえ。いま、みなわちゃんを襲うとしなかったかしら。」
ややドスがきいた声で言った。

「僕は、僕は……。」と言って、優は泣きながら走るように二階の自分の部屋に入った。

部屋の中にあるベットの布団の中でつぶやいた「僕はロボットに制服された人類初の人間なんだ。」

「こんな体験をする人間は、世界でどこにもいない。」「だれも僕の悩みなんか理解できない」

だが、みなわのミニメイド服姿、それに下着が透けて見えたのが脳裏に焼き付き、ついに性的発散行為をしようとしたとき、

まほろさんは、ベットにある布団を取り出して言った！

「エッチなのはいけないと思います！」

「良いですか、優さん、男だった、女の子をみて情欲をいだくことはしません。自棄になって不潔な行為をするなんて見損ないました。」

「だから、どうすればいいの？まほろさん！もう限界だよ……。」

優は、ムラムラした気持ちがぐぐえないと同時に、とても悲しい気持ちになった。

そのとき、悲しい気持ちを司る部分を操り、優は、今までの悲しみは何だったのか忘れてしまった。

で、ムラムラした気持ちが極限に達しており、理性を失い、ついに優は、まほろさんを襲うとした。

一瞬で気絶した優がそこにいた。

気がついた時、「ロボットに征服された人類初の人間だ」とつぶやいた。

「これでは、僕はどうにかなってしまう。。。。」

まほろさんのナノマシン・ジェルに支配される美里優（後書き）

思春期の少年が禁欲的な生活を強いられる。

ナノマシン・ジェルというハイテクに管理されたり、操られたりする少年、美里優は、どう反撃するのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5861y/>

美里優がなぜ、中林義貴へと名前を変えたのか

2011年11月25日23時55分発行